

# アメリカの図書館の思い出

学長 畑 博 行

アメリカの図書館の思い出といっても、私が滞在したほんのわずかの大学の図書館での見聞に限られることは言うまでもありません。その中でも、比較的頻繁に出入りしたハーバード大学の大学図書館で見たこと、感じたことの一端を披露するに止めたいと思います。

1960年代の初めに、私はハーバード・イエンチン・インスティテュートの招聘計画によりハーバード大学に留学する機会を得ました。到着早々外国人留学生のための図書館案内があるので、私もそれに参加することにしました。図書館といっても、ハーバードには大小さまざまな図書館があるが、最初に案内されたのはワイドナー図書館というハーバードの中央図書館とも言うべき立派な構えの大きな図書館でした。

この図書館は、1912年ヨーロッパからアメリカに向かう豪華客船「タイタニック号」に乗り合わせ、遭難後脱出かなわず、船と運命をともにしたハーバードの卒業生ハリー・エルキンス・ワイドナーという青年の母親が巨額の寄附をし設立したものです。彼女は、愛息が収集し大事にしていた数千冊に及ぶ貴重本を収蔵すると同時に、その名前を永遠に残したかったのです。

読者の皆さまも、1997年に上映されたレオナルド・ディカプリオ主演の「タイタニック」という映画を鑑賞されたと思いますが、この悲劇的な事件が個別の図書館としては全米第3位、大学附属図書館としては世界一と言われているワイドナー図書館を生み出したのです。この図書館はハーバードのキャンパスの中心部に位置し、古代ギリシャ風の円柱を配する玄関を備えた堂々たる建造物で、さすがハーバ

ードの図書館と感心したことを思い出します。

私は当時アメリカ憲法史に強い関心をもっており、その一環として南北戦争時の立憲政治について調べようと思っていました。そこで、後日ワイドナー図書館に出向き、リファレンス・ライブラリアンと呼ばれる文献参考係司書に相談をしたところ、早速南北戦争に関する膨大な図書が収納されている書庫に案内されました。この宝の山に感激したものの、この文献をいちいち借り出し参考にするのは大変だと内心困惑しているのを見抜いていたのか、ライブラリアンはすぐに私を窓際に連れて行き、そこにずらりと並んでいるキャレル（仕切りのある個人読書用のスペース）を指差し、その一つを予約するよう勧めてくれたのです。早速、手続きをして、キャレルの一つを確保し、（その間何回更新の手続きをしなくてはならなかったのかは忘れましたが）一学期間継続的に利用させてもらいました。ワイドナー図書館では、キャレルの利用者は随時読みたい本を書架から取り出し、自分のキャレルに積んで置くことができます。そして、一定の期間が過ぎるとライブラリアンが引き上げてくれます。お蔭で効率的に好きな本が読め、満足のいく研究が出来たと今もって感謝しています。

当時の日本の大学図書館の多くは、本の倉庫と言っても過言ではなく、スタッフも少なく、甚だ使い勝手の悪い場所でした。そのうえ、利用者のモラルも低く、貴重な文献を取り込んでしまってもなかなか返却してくれない教員も少なくなかったようです。

このモラルに関して、私はハーバード・イエンチン・インスティテュートの東アジア図

書館で恥ずかしい体験をしました。この図書館では、返却期限までに本を返却しないと制裁金を課せられることになっていました。私は旅行のためある本を期日までに返せなかったのです。理由を言えばきっと許してくれるだろうと甘く考えていたのは事実です。受付にはいつも「もの分かりのよさそうな」、温厚で愛想のよい老ライブラリアンが座っていました。私がこの職員に遅延したことを詫げ、その理由を縷々述べたのですが、「これはルールですから」の一点張りで、許してもらえず、結局制裁金2ドル（当時1米ドルは邦貨で360円）を払わされました。その時は、融通のきかない図書館員に一寸腹を立てましたが、あとになって職務に忠実なこの職員にむしろ敬意すら感じるようになったことは事実です。

さて、日本の図書館事情も、まだまだ問題はあるといふものの、随分改善してきました。近畿大学図書館も例外ではありません。現在、本学中央図書館には1,000を超えるキャレルが用意されていますし、職員の指導・援助やインターネットなどのお蔭で図書の検索もだんだんやり易くなっています。まだまだ、図書の収蔵スペース、専門職を含む職員の数の不足など多くの課題がありますが、本当に研究教育に役立つ使い勝手のよい図書館へと発展を続けるよう念じて止みません。

